

「ふるさと」の変貌

倉石忠彦

はじめに

一、故郷観の展開

- (1) 柳田国男の故郷観
 - (2) 流行歌に見る故郷
- 二、都市人と故郷

はじめに

文部省唱歌に「故郷」という歌がある。

一

兎追いしかの山

小鮒釣りしかの川

夢は今もめぐりて

忘れがたき故郷

二

如何にいます父母

恙なしや友がき

雨に風につけても

思いいづる故郷

三

こころざしをはたして

いつの日にか帰らん

山はあおき故郷

水は清き故郷

この歌は、遠く離れた地にあつて「ふるさと」を偲ぶ気持を歌つたもので、広く愛唱された。作詞者高野辰之は長野県下水内郡豊田村の出身であるから、この歌には作詞者本人の故郷に対する思いが籠められていると思われる。

ここには、まず幼時の思い出と、それを育んだ自然とが歌われている。自然は単にそこに存在するだけではない。忘れることができず、自然は、すなわちそこに色濃く印されている思い出なのである。それなるが故に自然は懐しいのである。また故郷は自らを生み育んだ両親をはじめとする親しい人々が生活している所でもある。故郷を思うということは、そうした人々を偲ぶことでもある。すなわち、故郷ということばによって指し示されるものは自然であり、肉親であり、友人であるということになる。そしてそれらは二重映し、三重映しとなって存在している。また、それらは山も水も美しい、より自然の卓越した村落であった。それであるから、ここで故郷を偲んでいるのは志を立てて出郷した人である。農村などから出郷して身を寄せるところは都会である。都会に住む人々は折にふれて自分の故郷を偲んだ。そして志を果した後には故郷に錦を飾って帰ることを夢みたのである。この逆はほとんどなかった。すなわち、志を立てて農村に赴き、都会を故郷として偲ぶということはほとんどなかったといつてよい。

つまり、ここに見られるのは、村と都市との対比であり、父祖伝来の墳墓の地と、常にそこに帰りたいと願っている人の住む都市という構図である。また、都市は世俗にかかわる文化の世界であり、村は自然の世界である、という関係でもある。そして、その両者の

間にあつて人々は、自然に回帰しようとしているとも見ることができ。すなわち、都市というものより、村の方により高い価値を認めているともいえる。少なくとも大正期、東京などの都会に出て来て生活している若者たちにとって、都市は一時の仮住いにすぎなかったのである。そこにおいて考えられる故郷は魂の常に帰るべき理想境であつたのである。⁽¹⁾ いったい、人々にとって故郷とはどのようなところであり、その姿はどのように変つてきたのであろうか。それを通して、村と都市との関係のなから、故郷というものの意味を考えてみたいと思う。

一、故郷観の展開

(1) 柳田国男の故郷観

柳田国男はその著『明治大正史 世相篇』⁽²⁾において、故郷をとり上げ、その意味を考えている。すなわち「第五章 故郷異郷」⁽³⁾である。ここで柳田は「故郷」という語を「村」と同義に用いるとともに、「都市」の対語としても用いている。人々のあまりにも故郷に対する思いが強い故に、村出身者である都市の住人は都市人になりきれないことを指摘する。そして、都市の住人の考える故郷は自ら

の記憶する故郷であるがために、故郷は固定化されてしまい、その変化はどのようなものであっても退歩と見なしてしまうというのである。故郷は過去のものなのである。そこに柳田は出郷者の身勝手とわがままを見出している。村の変化の大きな理由は興奮の増加であり、その原因は文字や新たな形式、あるいは漢語をはじめとする新しい言いまわしの流入などであり、新しい町の成立であるとする。元来一年のうち、わずかな期間しか興奮することがなかったものが、不断の興奮状況が生まれることになったのである。外部の影響により、従来の社会が変貌していくのである。それは村の生活の展開においてはさけることのできないことであった。しかし、出郷者たちはそうした事情を認めることをせず、単に望ましくない状況と見てしまうと柳田はいうのである。確かにそうした傾向は強い。しかし村の生活に興奮を持ち込んだのはまさに都市の様相であり、それを都市の在住者たちが非難したとすれば、それは彼等の身勝手以外の何ものでもない。

こうした変化は、村の外部からの力によってなされたものであるが、それだけが村の変化の条件ではない。外部からはむしろ道路を作るだけであるが、そこが自ら町場をなしてそれが契機となって村が変っていくと柳田は指摘する。そして道路の傍らが新居住者の落つける場所であり、地方民の仕事場として町場が成立し、そこに経

済の中心が形成されてくるのである。すなわち、新たな町の成立である。そして柳田はこの町の成立の中に村の人々の気性の変化を読みとろうとする。かつて村の人々は、「御揃ひ」⁽⁴⁾で他人と相違しないところに価値を置いていた。それが各人各様になり、態度は上っ調子の空々しいものになっていったと見るのである。新たな人々の作った町は、村の外観を変えただけではなく、人々をも変えていくのである。いわば村の都市化は道路によって流入してきたのである。そしてその都市化とは、施設としての都市化ばかりではなく、もっと大きな都市に通じる通路としての——柳田のいう飾り窓⁽⁵⁾としての——都市であり、人々を都市人化するという意味の都市化である。

しかし、こうした変化は村の中のみについて自らの村を見ていただけではなかなかわかるものではなかった。自らの村の変化を知り、意識することになったのは他郷を見たり意識したりするからなのである。

すなわち、異郷を意識する、あるいは異郷に対する興味を深め、異郷を知ろうとする態度から生じたのである。こうした態度を村人が持つようになったのは、やはり都市の生活者によってであった。都市の生活は、他国人と同郷人との雑居であり、そうしたものの中から孤立感を生じ、同郷意識も助長される。そして、異郷に関する

興味をかき立てられるのである。しかも、そうした性向は、村人も街道下りに対する関心という形で持っていたと考えられる。確かに「田舎の世間通が簾などの中から外を覗いているような姿」ではあったが、それが自らの故郷を明確に意識するきっかけになったのである。故郷という意識は異郷というものの存在によってはじめて認識されるものであることを柳田はここで指摘する。そして、この場合の異郷は故郷と本質的に同質のものであり、村同士であつてもよかった。しかし、その異郷を村に持ち込むのは都市であり、そうした意味では故郷・異郷という対比は、田舎・都市という対比でもあつた。田舎——村——故郷というものは、都市の存在によって際立つのである。都市の中においてより鮮明であるといつてもよいのかも知れない。

柳田は次のようにいう。⁽⁷⁾その都市は、異郷意識に満ち満ちている。それは主客不明の雑居地で、それ故に、村と違い、見る人と見られる人とが明確になっていない。そして見たい知りたいという知識欲が目覚めている所であるからである。そのために、都市の人の目は鋭く、また一種の社交術としての喧嘩もその必要があつたのである。ところが、田舎においてもおいおい喧嘩が生じてくる、と。これもまた都市化の一種で、外部と交渉が生じて来たこと、すなわち、異郷との交渉の結果としての都市化現象と見るのである。それによつ

て村はまた興奮の期間を長びかせることになったとする。

こうした都市化は、故郷を強く意識させるとともに、「故郷を退歩」⁽⁸⁾させたのである。それは外見的にも、精神的にもである。そして都市化願望もますます増長させることになり、町と村との対立のみならず、都市と都市との抗争も生じ、地方割拠の様相も呈してきた。その反面、離島や山村はかつて以上に孤立しようとしている。

結局、日本に無数に存在する故郷は、異郷の存在によって意識され、それは都市と対比させられることによって変化を来しつつあると柳田は見ているのである。故郷——田舎——村は異郷——都市の対立概念なのである。そしてそれは常に都市化にさらされている。なぜならば、都市を支持するのは国民であり、都市は前進の途上にあるものである。そして現在もまだ前進しつつあるのである。農村では都市を模倣し、都市化を推進させようとする。それは必ずしも成功するものばかりではない。多くの問題を内在させているのである。しかし都市化願望は村においても強い。かくして農村は内外双方から衰微せざるを得ない。こうしてみると、村の変貌を故郷の退歩と感ずる出郷者にとって、故郷はすでに意識の中に理想境としてのみ存在し、現実の村はすでに「故郷」であつて「故郷」ではないのである。

(2) 流行歌に見る故郷

「歌は世に連れ、世は歌に連れ」というが、流行歌はその時代と時代を生きる人々の真情をかなり正確に表している。流行するといふことは、その歌の中に大衆が真実を読みとりそれを支持するからである。少なくともそれに共感しひかれるものを含んでいない歌は支持されないであろう。大勢の人々の口の端にのぼることもないのである。確かに流行歌には作詞者・作曲者があり、その限りでは創作物で個人の感性に基づいた主観を中心にしたものである。だがそこに、時代に生きる人々の要求を含んでいなければ、何万という人々がそれを歌うはずはない。まさに「時代の経過とともに風化してゆく背景が喪失した時点で、如何なるヒット曲も全く過去の遺物となり、場合によってはアナクロニズムの様相さえ呈する場合がある。逆にそれだからこそヒット曲は、その時代相、特に庶民感情の普遍的表現をヴィヴィッドに映し出してくれるのである」。したがって流行歌の中に人々の意識を読みとることは十分できると思われる。そこで、明治以降多くの人々に愛唱された歌を通して、故郷をどうとらえていたかを見ていきたいと思う。

もちろん、歌というからには詞と曲と二つの要素がある。そして歌うものであれば曲を無視することはできない。愉快的気持・悲し

い気持・勇ましい気持など、その感情は曲に示されている。しかし、歌詞にもまた思想が盛り込まれている。曲に合わせて歌えばこれは歌である。しかし曲と切り離して考えることも可能である。この場合歌詞は音楽ではなくて文学になる。音楽としての歌詞は、曲に先立って存在していたものもあるであろうし、曲に合わせて歌詞がつけ加えられるものもある。そして流行歌は詞・曲の両方によって成立しているといえる。ただここでは、歌の中に籠められている故郷に対する感情や考え方を把握するという目的のために、いったん曲と詞とを切り離し、歌詞のみを対象として見ていきたいと思う。

明治以降、故郷を歌った歌として最初に登場してくるのは唱歌である。唱歌は文部省の音楽取調掛が欧米の音楽を学んで新しく作り出した歌曲であり、学校教育の中で歌われたが、そうした歌の中には教室を出て広く歌われたものもあった。こうしたものには、明治時代においても「美しき天然」「われは海の子」「案山子」「紅葉」「雪」「茶摘」「村祭」など村の生活を歌ったものが数多い。これは大正時代に入っても同様で「春の小川」「村の鍛冶屋」「早春賦」「海」「朧月夜」など数多い。しかしこれらは、村の生活とそれとよりまぐ自然を歌ったもので、いわば村の中で村を見て歌っているということが出来る。そして、そうした村の生活の四季を歌ったものに「いなかの四季」(堀沢周安詞、文部省唱歌、明治43)がある。

一

道をはさんで畠一面に

麦はほが出る菜は花盛り

眠る蝶々とび立つひばり

吹くや春風たもとも軽く

あちらこちらに桑つむおとめ

日まし日ましにはるごも太る

二

ならぶすげがさ涼しいこえで

歌いながらにうえ行くさなえ

ながい夏の日いつしか暮れて

うえる手先に月かげ動く

かえる道々あと見かえれば

葉末葉末に夜つゆが光る

三

二百十日も事なくすんで

村の祭のたいこがびびく

稲は実がある日よりはつづく

刈ってひろげて日にかわかして

米にこなして俵につめて

家内そろって笑顔に笑顔

四

松に火をたくいろりのそばで

夜はよもやま話がはずむ

母がてぎわの大こんなます

これがいなかの年こしざかな

たなのもちひくねずみの音も

ふけてのきばに雪降り積る

こうしたものは、都市から見ると確かに田舎すなわち故郷であった。その生活を理想化し、美しく歌い上げたのである。この歌に歌われていることがらはまさに村の一年の生活の展開そのものである。そしてこのような生活は明治時代においては、まだ広い地域で見られ、それだけその生活は普遍性を持っていた。田舎にあって田舎を見る視点を保っていたということになる。ところが、そうした歌の中で、他郷にあって故郷を偲んで歌うものもあつた。「故郷の空」であり「故郷の廃家」である。また「旅愁」(大童球溪詞、オードウェイ曲、明治40)は、旅にあって故郷を思うものである。

旅愁

更け行く秋の夜 旅の空の

わびしき思いに ひとりなやむ

一、故郷観の展開

恋しやふるさと なつかし父母

夢じにたどるは 故郷の家路

更け行く秋の夜 旅の空の

わびしき思いに ひとりなやむ

窓うつ嵐に 夢もやぶれ

遙けき彼方に ころまよう

恋しやふるさと なつかし父母

思いに浮かぶは 杜のこずえ

窓うつ嵐に 夢もやぶれ

遙けき彼方に 心まよう

ここに歌われるのは、ものわびしい秋の気配とそれによって誘い出される望郷の思いである。そしてその故郷を象徴するものは肉親であり、故郷における生活を包んだ自然でもある。もっともこの歌では自然に対する感慨はそれほど強くなく、具体的に歌われているのはもっぱら両親である。こうした人に故郷を感じとるのはこの歌にとどまらない。「故郷の空」においては父母と兄弟であり、「故郷の廃家」においては「遊びし友人」であった。すなわち、故郷はそこに住む人と結びつけられることによって意識されていたということになる。自然がそれほど際立っていないということは、故郷と

異郷との間に自然環境の落差がそれほど大きくなかったということになるか。だが、田舎の自然と人事とを歌い込んだものも多いことは先に触れたが、そうした歌が望郷の念をかき立て、故郷に対する思いを籠めていたことも事実であろう。ここに、故郷は美しい自然にかこまれ、昔なじみの友人と、懐しい肉親の住む所としての認識を読みとることが可能である。従って、そこから切り離された自分には常に故郷に帰ろうと願い、故郷と一体化することを念じているのである。それは、志を立てて故郷を出達した人々が、いつか故郷に錦を飾ろうとしていた時代的背景と無縁ではあるまい。美しい故郷を心に描いていたのである。

こうした故郷観は、明治・大正だけではない。遠く離れた故郷は理想境なのである。「叱られて」（清水かつら詞、弘田龍太郎曲、大正9）でも、「二人のお里は あのを／越えてあなたの 花のむら」と歌われる。この村は現実の花盛りの村であったのかも知れないが、それだけではなく異郷にある者にとっては、正に「花のむら」であったのである。このような視点は昭和に入っても基本的に変化はなかった。「夕陽は赤し 身は悲し」と歌い出す「湖底の故郷」（島田磐也詞、鈴木武男曲、昭和12）もそうである。ただこれは湖底に沈んだ小河内村を歌い、故郷を亡くした人の悲しみの情を詩想の中心としているため、故郷の情景そのものはそれほど具体

的には歌われていない。しかし、戦時下にあつて望郷の念を切々と歌い上げた「誰か故郷を想わざる」（西条八十詞、古賀政男曲、昭和15）には、異郷にあつて思う故郷の情景はきわめて具体的に描き出されている。

誰か故郷を想わざる

一

花摘む野辺に 日は落ちて
みんなで肩を 組みながら
唄をうたった 帰りみち
幼馴染みの あの友 この友
ああ 誰か故郷を想わざる

二

ひとりの姉が 嫁ぐ夜に
小川の岸で さみしさに
泣いた涙の なつかしさ
幼馴染みの あの山 この川
ああ 誰か故郷を想わざる

三

都に雨の 降る夜は
涙に胸も しめりがち

遠く呼ぶのは 誰の声

幼馴染みの あの夢 この夢

ああ 誰か故郷を想わざる

花咲く野辺の夕暮れ、そこで遊んだ思い出と友人達。そして肉親の思い出。感傷を誘う山と川。それを遠く離れた都で思いやるのである。こうした構図は故郷を歌う歌にはくり返しくり返し登場する。

ところが、戦後昭和三十年前後には田舎を舞台としたい、いわゆる「ふるさと演歌」が流行する。田舎を舞台にする点は明治・大正の村を歌った唱歌と同じである。ところがこれは、故郷を思う歌であるとともに、田舎にあつて出郷した人を感じる歌でもあった。そこに大きな相違点を見出すことができる。「あの人は あの人は／わたし一人をおいていった」と歌う「白樺の小径」（佐伯孝夫詞、佐々木俊一曲、昭和26）はその早い時期のものである。これは田舎に残された乙女の嘆きを歌うだけのものであるが、故郷から都会にいる者に呼びかける歌もある。「早くコ 早くコ／田舎へ帰ってコ／東京ばかりが なんていいものか」（「早く帰ってコ」高野公男詞、船村徹曲、昭和31）と呼びかけ、「可愛いあの娘は 俺らを見捨てて／都へ行っちゃった」（「お月さん今晩は」松村又一詞、遠藤実曲、昭和32）と嘆く。そしてついには「おいらをだまして 置いてった／兄ちゃんも お前も／馬鹿っちょ ホイホイ」（「夕焼けとん

び」矢野亮詞、吉田矢健治曲、昭和33）と田舎を忘れ去った出郷者にその淋しさを訴えるのである。しかし「遠い都へ 離れた人を／そつと偲びに 村娘／谷の瀬音が 心に沁むか／涙ひとふき してとおる」〔山の吊橋〕横井弘詞、吉田矢健治曲、昭和34）くらいしか田舎に残された者には、する術がなかったのである。「リンゴ村から」(矢野亮詞、林伊佐緒曲、昭和31) もまたそうした歌の一つであった。

リンゴ村から

一

おぼえているかい 故郷の村を
便りも途絶えて 幾年過ぎた
都へ積出す 真赤なリンゴ

二

見る度辛いよ 俺らのナ俺らの胸が
おぼえているかい 別れたあの夜
泣き泣き走った 小雨のホーム
上りの夜汽車の にじんだ汽笛
切なく揺るよ 俺らのナ俺らの胸を

三

おぼえているかい 子供の頃に

二人で遊んだ あの山小川

昔とちつとも 変っちゃいない

帰っておくれよ 俺らのナ俺らの胸に

ここに見られるのは、昔なじみの友人に対する思い、そして故郷の山であり小川である。まさに「兎追いしかの山 小鮒釣りしかの川」〔故郷〕によって故郷を象徴しているのである。ところが、かつての故郷の歌と大きく相違するのは、そうした故郷を出郷者たちは見捨てつつあるということである。「帰っておくれよ」と呼びかけなければならぬ状況にあったということである。これは、経済の高度成長を目前にして、農村の若者がどんどん都市に吸収されていったという時代背景を考慮する必要がある。そうした人たちの故郷への思いはしかし、単なる望郷の念だけではなかった。故郷の価値より都会のそれの方が卓越していたのである。それなるが故に故郷にある友人や肉親などに対する感情、そして自然に対する感慨は屈折したものにならざるを得ないのである。

これらの歌は、田舎にあって都市にいる人を思う歌であり、「故郷」にあって「異郷」にある人に呼びかける形式になっている。しかし実際にこうした歌を愛唱したのは、「故郷」に対する心の傷を感じずにはいられなかった異郷にある人々なのである。そして、その人々の心に描く故郷は、炉端を囲む肉親の居る所であり、幼なじ

みの住む村なのである。また、淋しい田舎ではあってもとんびが飛び、一番星が輝き、祭りが行われる。猟師や炭焼きが渡る吊橋のある、すなわち美しい自然の満ちあふれた場所なのである。

もちろん、都市にあって素直に故郷を思う歌がなかったわけではない。「白い花の咲くころ」(昭和25)、「別れの一本杉」(昭和30)、「チャンチキおけさ」(昭和32)、「柿ノ木坂の家」(昭和32)、「赤い夕陽の故郷」(昭和33)、「夢ば見ていた東京さま来たが」(昭和34)、「ああ上野駅」(昭和39)、「ふるさと」(昭和48)、「北国の春」(昭和52)などはいずれも望郷の歌であり、こうした歌は時代にかかわらずなく歌われて来たともいえる。そして、こうして偲ばれる故郷と対立するところに都市——都会があり、それを歌ったいわゆる「都会調演歌」も昭和三十年前後から流行したのである。

ところで、出郷者が田舎である故郷を思う歌だけではなく、都市人が故郷を思う歌も登場する。村から出て来て都市に住む人がしだいに増加し、都市に生まれ育った人々——いわば根生いの都市人が増加してくると、かつての故郷観と異なるものが見られるのである。例えば「ふるさと欲しや」(横沢千秋詞、竹岡信幸曲、昭和10)などである。

ふるさと欲しや

一

ふるさと欲しや 夢ほしや
都に住めど わたり鳥
旅から旅の 旅先で
生まれた子ゆえ 里知らず

二

ふるさと欲しや 夢ほしや
父母の故郷は 馴染みなし
移り変りの 山河に
かりにも通う 夢もなし

三

世の起き臥しに 疲れては
憩いの土地の よるべなく
人の誓いに やぶれては
泣いてや帰る 里もなし

四

ふるさと欲しや 夢ほしや
まこと情けの 里ほしや
ふるさと持たぬ 旅の子は
いつの日 どこへ帰るやら

ここには都市内を移動する人々の嘆きと、田舎という故郷のない

者の不安が歌われている。この四連に見られる故郷は、まず出生の地としての里であり、そこに一定の生活の記憶が刻まれている地である。そこは魂の安住の地であり、最後には抱きとめてくれるはずの憩の地なのである。「ふるさと欲しや 夢ほしや」とくり返されることばの中に、ふるさとを持つことのできない不安がうたわれるとともに、ふるさとに対する限りない憧憬が秘められているのである。故郷は異郷と対比されたときに意識されるものではあるが、その異郷と対立するだけの確固とした中心を持っていなければならぬのである。自己の精神の中枢をなすもの、それと故郷とは深く呼応するものなのである。「都に住めど」都はまだそれだけの意味を持っていないのである。都にそれだけの意味を持たせてくるのは、これよりずっと後になる。

都市、それも東京に故郷を認めて、それを歌うようになるのはそれから二十年後、昭和三十年代に入ってからなのである。東京に故郷を見る場合、見方には二種類ある。その一つは伝統的な社会である下町を歌ったものである。そして、そこに育った者がしばらく離れていてそこを思うというもので、これは田舎を故郷として歌うものと基本的には同じである。「どうした どうした どこ行った／石けりした娘よ 酒屋の娘」と歌う「下町坂町泣ける町」(横井弘詞、佐伯としお曲、昭和36)は、幼なじみを思い、その思い出を育

んだ町を歌っている。確かに田舎を故郷として歌った歌では、豊かな自然を背景として歌うのに対し、ここでそれに相当するのは路地であり酒蔵である。そうした舞台装置こそ異なっているが、人に托して過去の良き思い出を歌うのである。そうした意味では基本的に田舎を故郷とするものと大差はないのである。

もう一つは盛り場を「ふるさと」とするものである。これには「おさらば東京」(昭和32)、「東京の灯よいつまでも」(昭和34)、「新宿そだち」(昭和42)、「新宿・みなと町」(昭和54)など数多い。これは生活の場として都市をとらえ、そこに生活の根柢をおこうとしているものである。いわゆる「故郷」とは多少その様相を異にするが、そこを心の支えとしている点は同じである。また、心のふるさととするものも当然生まれる。「銀座の雀」(野上彰詞、仁木他喜雄曲、昭和30)などである。

銀座の雀

たとえどんな人間だって
心のふるさどがあるのさ
俺にはそれがこの街なのさ
春になったら細い柳の葉が出る
夏には雀がその枝で啼く
雀だって唄うのさ

悲しい都会の塵の中で

調子っぱずれの唄だけど

雀の歌は おいらの唄さ

銀座の夜 銀座の朝

真夜中だって知っている

隅から隅まで知っている

おいらは銀座の雀なのさ

夏になったら啼きながら

忘れものでもしたように

銀座八丁とびまわる

それでおいらは楽しいのさ

すてばちになるには

余りにもあかるすぎる

この街の夜も この街の朝にも

赤いネオンの灯さえ

明日の望みにまたたくのさ

昨日別れて 今日今日は今日のさ

はれて好かれて さようなら

後にはなんにも残らない

春から夏 夏から秋

木枯しだって知っている

みぞれの辛さも知っている

おいらは銀座の雀なのさ

赤いネオンによいながら

明日の望みは風まかせ

今日の生命に生きるのさ

それでおいらはうれしいのさ

ここには銀座の四季が歌われている。そして雀がおり柳がある。

木枯しとみぞれがある。田舎の自然に比較して何と貧しい自然であることか。しかし、その自然を含んでネオンの街をふるさととするのである。そこには人と人との交流がある。このふるさととは過去のものではない。今現に生きて変化しつつある、その変化こそが心をなごませる。それが都市のふるさとなのである。そこには過去を美化し、理想化する視点はない。「昨日見た夢に すがって泣いちゃ／生きては行けない」銀座なのである。また「つくりものでも 花咲く銀座／ここが小さな ふるさと」であり、「今日は明日を忘れ」て生きなければならないのである（「銀座の蝶」横井弘詞、桜田誠

一、故郷観の展開

表1 用語一覧表

用語	曲数	72曲に対する(%)	354曲に対する(%)	その他の用語		
				酒	リンゴ	訛
夢	19	26.4	37.6	汽車・汽笛	白樺	
母	17	23.6		東京	星	
花	16	22.2		兄弟	百合	
川	16	22.2		祭り	丘	
月	15	20.8		歌	麦	
山	14	19.4		雨	稲	
娘	13	18.1		都	いちご	
風	12	16.7		馬	銀座	
父	11	15.3		馬	座	
鳥	11	15.3		いろり	会	
友	9	12.5		雲	ネオン	
涙	9	12.5		嫁・嫁ぐ	夕焼	
夕陽	9	12.5		雪	台	
夕暮	8	11.1		空	灯	
恋	8	11.1	別れ	新宿		
				海		

表2 用語内容一覧

	事物	曲数	備考
自然	自然物	51	花, 木, 鳥, 虫
	地形	36	山, 川
	天象	28	雨, 風, 雪
	時	19	夕暮, 夕焼, 夕陽
	夜	18	月, 星
人物	親	34	母, 父, 兄弟姉妹
	幼なじみ	28	友, 娘
感情	夢	19	
	涙	9	
	恋	8	

一曲、昭和33)。田舎を異郷として、都市に生きる人々の故郷は、当然都市に求めるしかないのである。明治以降の歌の幾つかをとり上げて、そこに歌われるふるさとの様子を見てきた。そこにはふるさとをイメージするさまざまなこと

ばがちりばめられていた。そこで、ふるさとを歌った歌に用いられていることばについて、整理しておこう。明治以降昭和五十五年までの流行歌のうち、軍歌と股旅ものを除いて、ふるさとを歌った歌として抽出できたものは七二曲⁽¹⁰⁾であった。ここに歌われていること

からは一〇五種類にのぼった。そして延べ曲数は三四曲であった。このうち使用曲数の多いものを並べてみると表1のようになる。これらはその単語ごとの集計であるが、内容ごとに整理すると多少違ったものになる。すなわち表2である。こうして見ると、涙ながらに夢見るふるさととは、美しい自然にあふれ肉親や友人の住む所であるとする観念が明確に読みとれる。またそのふるさととは夕暮れや夜にかかわっていることが知られる。少なくともそこには異郷としての都市に対立するイメージがあるのである。確かに東京を、都市を歌い、ネオンを歌うものもある。しかし、それらは多く故郷を思い出す契機として歌われることが多いのである。

ここでフォークソング系の歌を一つ見ておこう。中島みゆきの「異国」である。

異国

とめられながらも去る町ならば
ふるさとと呼ばせてもくれるだろう
ふりきることを尊びながら
旅を誘うまつりが聞こえる

二度と来るなと唾を吐く町
私がそこで生きてたことさえ
覚えもないねと町が云うなら
臨終の際にもそこは 異国だ

百年してもあたしは死ねない
あたしを埋める場所などないから
百億粒の灰になってもあたし
帰り仕度をしつづける

悪口ひとつも自慢のように
ふるさとの話はあたたかい

忘れたふりを装いながらも
靴をぬぐ場所があけてある ふるさと

しがみつくにも足さえみせない
うらみつくにも袖さえみせない
泣かれるいわれもないと云うなら
あの世も地獄もあたしには 異国だ

町はあたしを死んでも呼ばない
あたしはふるさとの話に入れない
くにはどこかときかれるたびに
まだありませんと うつむく

(後略)

この歌にもふるさとは歌われている。故郷の記憶はあり、その温かさも自覚している。しかし、そうでありながらそうしたふるさとに満たされず、町にふるさとを求めようとする。大体ここには故郷の実体はない。漠然としたふるさとというもののしかない。具体性がないのである。どこかに頼りとすべき場所を求めていながら、それは観念化されてしまっているのである。実体のある故郷といったん切れてしまったところにふるさとというものを考えざるを得ない現

二、都市人と故郷

代人のふるさと観なのかも知れない。異郷としての都市に住む出郷者は都市の中にあることを求め、拒否され続けるのである。都市はただふるさとになるだけの準備が整えられていないのかも知れない。

二、都市人と故郷

東京都調布市は、昭和三十年に北多摩郡調布町と神代町とが合併して生まれた市である。多摩川の北の台地上及び湧水を集めて流れる川沿いに集落が展開していたが、甲州街道沿いには近世に街村が発達していた。近代以降東京の近郊農村としての性格が強かったが特に京王線電車で新宿まで一時間以内で到着する交通の便によって、現在では近郊住宅地として一層発展してきている。新市成立以後の人口増加の状態は、表3に見られるとおりである。昭和三十年代に飛躍的に人口が増大し、それ以後は、増大のスピードこそ落ちたものの、まだまだ増大の傾向にある。

この調布市では「ふるさと」というものを、どのように見ているであろうか。ここ二か年ほどの市報の記事を対象として概観してみよう。市報を対象としたのは、これが市の広報紙であり、行政としての、すなわち都市側の考え方がより端的に表れていると考えたからである。この調布市は先述のように近郊都市としての発展が著し

表3 人口及び世帯数

	人 口			世 帯 数			1世帯当 り家族数
	人 口	前年比	30年比	世 帯	前年比	30年比	
昭和30年	45,362			9,650			4.70
35	68,621	1.51	1.51	16,385	1.70	1.70	4.19
40	118,004	1.72	2.60	32,019	1.95	3.32	3.69
45	157,488	1.33	3.47	46,573	1.45	4.83	3.38
50	175,924	1.12	3.88	57,247	1.23	5.93	3.07
55	180,535	1.03	3.98	66,918	1.17	6.93	2.70
60	184,407	1.02	4.07	72,792	1.09	7.54	2.53

いが、それでもかつての農村の景観を残したり、その名残りを見出したりすることができる。昭和六十年八月十一日には、第二八回調布市郷土芸能祭ばやし保存大会が開かれ、市内一二か町の祭ばやしが出演し、山車も出された(市報六五四号)。当然この祭ばやしの背後には、それが演じられ奉納される各集落の鎮守とその祭りが存在している。祭ばやしを伝承するために保存会が作られる。すなわち保存会がなくては維持できなくなっているという現状はあっても、これだけの祭ばやしは演じられているということは、まだその支持基盤が存在しているということである。

また調布には「ちょうふ八

景」と称するものもある（市報六四八号）。次のようなものである。

深大寺と神代植物公園

四季の多摩川と花火

調布不動尊と国領神社の千年藤

実篤公園と記念館

近藤勇の史跡と野川公園

上石原若宮八幡とはげの緑

布多天神と市

花菖蒲と百花苑

ここに数え上げられているものの中には、非常に新しいものも含まれている。いつどのような経過で選ばれたものか、どの程度に市民の支持を得ているものであるかなどということについては不明である。またこれらは名所旧跡とでも称した方がよいもので、必ずしも伝統的な八景をふまえているものではない。数え上げられているものも二つずつであるから十六景が対象となっているのである。もともと二番目に数えられている「四季の多摩川」などというのは季節ごとに数えても四景であり、条件を考慮するとすれば数えられないほどの数にならう。具体性には乏しいのである。しかしともかく、調布市域において美しい自然を見出そうとし、また伝統をふまえようとする姿勢は見てとることができよう。

そのほか、「納涼ふるさとまつり」が八月二十四、二十五日に行われたことが報じられている（市報六五五号）。ここで行われたものは、前夜祭としては、カラオケ熱唱コンテスト、ヤングミュージックフェスティバル、ミス調布コンテストなどであった。また納涼おどりとして調布音頭も踊られた。このほかパレードや「ちびっこわんぱくすもう大会」「近藤勇を偲ぶ会剣舞」が行われ、露店・夜店なども出された。神社とは無縁の作られた祭りではあるが、それを「ふるさとまつり」と称するところにも一つの姿勢を見てとることができる。祭りは地域を意識し、それをあえて「ふるさと」と称するのである。旧来の田舎としての性格を残しつつも、そこに在住する新住人を地域にとり込んでいこうとするのである。調布を新住人のふるさととしても機能させたいという願望といった方がよいのかも知れない。しかし市自体がふるさとキャンペーンを張っているというわけではない。

「市報」の企画に「ふるさとみつめた」という写真を主にした記事がある。タイトルをそのまま理解すれば、すでに調布市における日常生活の中で、めったに目に触れることがなくなった「ふるさと」がここにはあったということにならうが。そうであるとすれば、ここにとり上げられるものを見ることによって市の広報紙の考える——行政レベルで考える——「ふるさと」というものが理解できる

表4 ふるさとみつけた

号	日付	場所	対象	備考
646	昭和60年 4月20日	若葉町3丁目	緑の坂道	静寂
648	5月20日	仙川町3丁目	竹の子畑の竹林	竹林、揚羽蝶、竹の子
653	7月20日	佐須町、佐須街道	早苗田に浮ぶ松林	早苗田、松林、神明様
655	8月20日	深大寺、水生植物園	水生植物園	湿原、調布の原風景
658	9月20日	上石原2-48-2	坂	ハケ道、畑道、今は昔の景色
660	10月20日	国領町5丁目	布田駅	木造の駅舎
662	11月20日	東つつじヶ丘1-15	滝坂	馬宿、遠い昔の景色
665	12月20日	深大寺南町2丁目	ひきずり坂	蛭、沢ガニ、伝説、枯れ木立
667	昭和61年 1月20日	深大寺北町3-26	雑木林	枯葉、くず掃き
669	2月20日	国領町7-11	櫛	武蔵野の風景
675	4月20日	仙川町3丁目17	仙川	武蔵野の面影
677	5月20日	深大寺元町5丁目	深大寺裏の小道	鳥、木
679	6月20日	野川公園	野川公園	小川、水遊び
690	10月20日	下石原八幡神社	獅子舞	祭り
692	11月20日	多摩川住宅	日だまり	街路樹
695	12月20日	電通大ランド付近	多摩川	多摩川、夕暮れ、川の流れ

であろう。そこで、とり上げているものを一覧表にしてみよう(表4)。こうして見ると、台地上に立地するという調布市の自然条件として特徴のある坂道を対象としているのが目立つ。しかもそれらは緑の、あるいは葉を落した木々とかかわりの中でとらえられている。これは当然、木や川などというかつての武蔵野の風景と結びついている。記事の中に「調布の原風景が浮かびあがる」(六五五号)、「遠い昔の景色の中に身を置く」(六六二号)、「武蔵野の風景」(六六九号)、「武蔵野の面影を残す土手伝い」(六七五号)などとあるのがその何よりの証である。いわば豊かな自然とかつての村の生活に基盤をおいているのである。護岸工事の施された仙川も取り上げられてはいる。しかし中心はその整備された川にあるのではなく、季節の花の咲く土手なのである。自然以外に取り上げられているものとして京王線布田駅がある。これは木造の駅舎という今では珍しくなった古びた建物に関心があるのである。獅子舞を取り上げたのも基本的には同様であろう。ただ一つ武蔵野と縁のないのは多摩川住宅である(六九二号)。しかしこれとても街路樹が対象であり、季節感にその関心があった。現在より過去にふるさとを認めようとしているのである。

しかし、調布市民にとって調布が「ふるさと」であるのは自明の理であり、あえてそれを強調する必要はないとする考え方があ

うである。市制施行当時より世帯数にして約八倍、人口にして四倍以上にもなり、新住民が圧倒的に多くなっても、三十年という年月の中で増加であるため、旧住民と新住民との間の軋轢がそれほど表立たなかったためなのである。新住民に対して調布をふるさととすべきだとする強い呼びかけは、広報紙を通じては行われていない。というより「ふるさと」ということばをあえて用いる必要性を感じていないかのように思われるのである。

それよりも目立つのは、調布市と姉妹都市の関係にある、長野県下高井郡木島平村に作られた木島平山荘を中心としての「第二のふるさと」づくりの考え方である。木島平山荘は三億八〇〇万円を投じて建設した地上四階地下一階の保養所で、収容人員一〇〇名である。昭和六十年七月二十三日に落成式をあげた。これに関する記事は毎月のように掲載されている。巨額の経費を投じたものであるから、その関心の強さは当然でもある。この山荘の落成を機に姉妹都市の調印も行われたが、ここを拠点として、「四季折々の自然とのふれあい、市民と村民との交流」(二六五四号)をはかることによって、木島平村を第二のふるさととしようとするのである。もちろん第一のふるさととは調布である。どんな人でも調布に住んでいる者は調布をふるさととすべきであるという無言の規制がそこには存在する。それはともかく、一体なぜ第二のふるさとが必要なのである

うか。それに対する明確な理由は示されていない。しかし木島平村の四季折々の自然と、村人の素朴さとの強調などから察すると、調布などではすでに失われてしまった豊かな自然や素朴さを他に求めることによって、補完しようとしているかに思われる。ふるさとというからには、そうしたものがどうしても必要なのである。そこには父祖伝来の地とか、心の支えとかというようなものに対する関心はそれほど強く見出せない。生活の根拠地としての調布と、そこにはないものを木島平村に求めようとしている。いわば、第一のふるさとと第二のふるさととが一緒になって、はじめて「ふるさと」が完結するとしているようである。

こうした、都市ではすでに失われてしまったもの、田舎にこそあると思われるものを求めようとするのは、調布の第二のふるさとづくりに見られるだけではない。都市に住む人々のかなり強い考え方である。ところが田舎にこそあるものうち、山や川などという自然環境はなかなか容易には手に入らない。出郷者たちは益暮に故郷に帰って、自然となつかしい思い出に浸ることができる。しかしその自然は必ずしも昔のままではなく、故郷は退歩していく。また故郷と疎遠になったり、都会生れ、都会育ちの者たちも増加してくる。仮に豊かな自然に触れることができても、それは日常的なものではない。ほんの短時間のできごとなのである。父祖の地・墳墓の地と

強く結びつけられていれば、短時間であっても「ふるさと」の意識は強調されよう。しかし、都市に定着し、帰属意識が強くなり、単なる非都市がふるさとと感じられるだけであるような状態においては、田舎——ふるさととは普遍化されてしまおうであらう。田舎風のものはずべてふるさとと結びつけられてしまおうのである。

例えば、朝日新聞マリオン版に「ふるさと情報」という欄がある。ここで情報として取り上げられているものは、各地の特産品である。その特産品を様々な形式で、都市からの要望に応じて宅配しようとしている情報なのである。昭和六十一年十一月十三日の情報は「ふるさと会員制度」であった。年間幾らかの会費を払込めばいろいろの特産品を送ってくれるのである。例えば「民話のふるさと新鮮便」と称するのは岩手県遠野市のものである。りんどうコース（一万円で年二回）、やまどりコース（二万円で年三回）、いちいコース（三万円で年四回）の三つのコースがあり、やまめの燻製、鏡もち、地鶏、マイタケなどを送ってくれる。それぞれの地域で「ふるさと」を連想すると思われるような名称をつけて特産品を販売しているのである。それが「ふるさとバック」（山形県米沢市）などとも称され、文字通り「ふるさと」を販売するわけである。いいかえれば、「ふるさと」は買えるものなのである。

坪井洋文氏は都市民の認識する故郷について次のようにいう。

かつて民俗学的研究の主な対象としていたムラの生活風景は、生き生きとした生産の場としての意味を喪いながら、死者の靈魂だけが集まる他界的風景へと、静かな移ろいを開始しているようである。それは都市生活者にとって、自分の居住している都市空間と、自分が生まれ育った故郷空間とは、現次元では連続した空間であっても、死んだ肉親や自分の死後との関係においては、異次元の空間になりつつあるという認識なくしては、山村の民俗の変化が現代に問いかけている意味は理解できないというひとつの証言でもあると考えている⁽¹⁾。

都市と故郷とは、現世においては連続した空間であっても、死後においては異次元の空間になりつつあると認識しているのである。ここには現代の都市民の故郷観が的確に把握されている。こうした認識とともに、少なくとも先に見たような売買されるふるさとからすると、その連続している都市と故郷との空間は、相互にどこまでも拡散し合って、その境域をあいまいにし、個性を失いつつあると見ることが出来る。ところが、そうした状況においても人々は、「ふるさと」ということばに異常に強く固執する。都会人は自らの住むところに価値をおき、そこに生活基盤を据える。そうした意味では都市をふるさととしようとしながら、感情的には他の地域にふるさとを求めようとしていると見ることが出来る。連続した空間の

中で二つの世界が重なっているのである。このような状態からすると、現世においてもすでにその連続した空間は、異次元的な様相を帯びてきているのではないかと思われる。

しかしこれは、全国的に都市化が進行している現状からすれば、しかたのないことであるのかも知れない。非都市的状況の中にふるさとを見出す、実はその非都市的な状況がしだいに影をひそめているのである。そうしたところでは非都市的状況というのは、都市化現象の中で作り出されたものなのである。作られた田舎であるならば、消費されるべき対象として都市で売買されることもやむを得まい。それは、都市化に蚕食され、田舎がその性格を弱めていく中で、あえて作り出した虚像とでもいえるものであるからである。デパートの販売企画に、各地の特産物を集めて販売するものがあり、それが「ふるさと」ということばと結びつけられている。そこで売られているのはふるさとらしさ——非都市らしさ——である。異郷と對比され、別の世界と結びつけられるようなものではない。異郷を通して自らの世界を認識するという緊張関係は認められないといつてよい。

それでは、都市にとってふるさととはすでに不必要なものになっていくのであろうか。そうは思われない。都市人がいかにふるさとを求めているかということとは、「ふるさと」ということばの氾濫によ

っても明らかであろう。ただそのふるさととは底の浅いものとなっているのである。手軽に売買できるようなものが多いのである。都市の優越を信じ、その上でふるさととしての田舎を求める都市民の認識を、そこに認めることができるように思われる。そしてそれは墳墓を田舎から都市に移し、父祖伝来の地としだいに疎遠になっていくとうとする人々の存在と、無関係であるとは思われない。かつて都市は、田舎の人々が育み発展させたものであった。今、都市民はその田舎をどうしようとしているのであろうか。単なる消費の対象とするだけであろうか。過去の思い出の地として懐旧の念の対象とするだけであろうか。都市の母胎としての田舎の存在を、もう一度評価しなおす必要があるのではないかと思われる。

註

- (1) 明治時代の若い出郷者達と故郷との関係については、木村龍生著『序章のフォークロー』（昭和五十五年）でもとりあげられている。
- (2) 『定本柳田国男集』第二四巻、筑摩書房所収。
- (3) 同前二三五頁から二五四頁。
- (4) 同前二四二頁。
- (5) 同前。
- (6) 同前二四四頁。
- (7) 同前二四五頁以下。
- (8) 同前二二六頁。
- (9) 池田憲一『昭和流行歌の軌跡』二五五頁、白馬出版、昭和六十年。

(10) 古茂田信男・島田芳文・矢沢保・横沢千秋編『日本流行歌史』戦前編・戦後編、社会思想社（昭和五十五年・五十六年）所収のものより抽出。

(11) 坪井洋文「故郷と都市民」『民俗再考―多元的世界への視点―』二一九頁。日本エディタースタール出版部。昭和六十一年

追記 本稿は昭和六十三年二月に脱稿、提出したものである。

それ以降本稿と同様に流行歌等を対象とした次のような論考が公表されている。残念ながら本稿にはこうした成果をとり入れることはできなかつた。

宮田 登「流行歌の中の「故郷」観」『春秋生活学』第三号、昭和六十三年一〇月

小川正賢、高橋みゆき、関聖子

「日本の昔話とわらべうたに潜む自然観の抽出」『季刊人類学』

二〇一一 平成元年三月

朝倉喬司『流行唄の誕生』青弓社 平成元年六月

（國學院大学 文学部）

Transfiguration of One's "Home"

KURAIISHI Tadahiko

The "Furusaso" (home or native places) which residents of cities recall in mind, what implication does it have?

After YANAGITA Kunio, the famous folklorist, the native places or home the inhabitants of cities recall in mind or imagine from time to time after their departure therefrom are nothing but an illusion. They are kept deep in mind and felt in keen contrast with the strange lands they now live in. Thus their home or native places change incessantly in their mind, he says.

What is the identity of the "home" sung in our popular songs? In most cases, they are no other than some souvenirs in their childhood and the nature which fostered it. There are living their parents and other familiar persons. Though what is really meant by the word "Furu-sato" or home is dependent on each person, there always are the existence of Mother Nature and that of familiar persons. Moreover this "Nature" is closely linked with the existence of their villages which have gradually been beautified in their imagination. In other words, the native places are an antagonism of cities. In this antagonism, one side is an imaginary world and the other, the reality; peaceful life on the one hand, and the struggles in this world, on the other.

In 1950s however, with their longer life in urban areas, there came a plenty of popular songs which allowed them to find the "raison d'être" in their urban life. In these cases, their "home" were displaced into the most city-like places. This implies that the conversion of value began in these days from village-like things into urban things. But our cities cannot still be our own "home".

The "home" as appeared in the public relations bulletins published by Chofu City, Tokyo has two different faces. One of them has been rooted in it that their actual home is there as base and center of their very life, namely rooted into the reality. The other face is settlement-like one such as tradition, nature and so forth, which can provoke yearning for good, old days. In conclusion, the "home" as seen in the urban life remain illusory under the conditions of which we can yet hardly recognize our home in our daily urban life in cities.